
バーサスゴッド・オフライン

アレハンドロ久保田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バーサスゴッド・オフライン

【Nコード】

N8194Y

【作者名】

アレハンドロ久保田

【あらすじ】

ロボットアクションVRMMORPGで遊んでいた青野 菜月と仲間達。ある特別なクエストを受注したことにより、彼女達の運命は激変する。硝煙と、鉄の臭いが満ちる戦乱の異世界。その戦いの真っ只中へと飛ばされた菜月達は、そこで人族の王女と出会う。内乱に巻き込まれる菜月達は果たして元の世界に帰れるのか。

あれが噂のSUNZU River(前書き)

新連載です。

感想、評価、誤字脱字のご指摘などがありましたら、お気軽にどうぞ。

あれが噂のSUNZU River

彼女の姿を見る者があれば、その身に纏った雰囲気にも声をかけるかもしれない。知り合いなら飯の一つでも奢るかもしれない。

それだけ全身から切なげな、諦めの空気が滲み出ている。

しかし、その姿を見る者は誰もいない。身体のラインが浮き出たブルーのパイロットスーツを縛り付けるように、二重のベルトで固定されている。

このベルトをするたびに身を守られていると考えるよりも、自分を逃がさないためのベルトだと彼女はいつも思う。

また腕も伸ばせないほど狭苦しく、配線とコンソールに囲まれた真つ暗なコクピット。身体の左右に配置された操縦桿を握り潰そうとしているかのように、思い切り両手に力が入っている事に気付いた。

「リラックス……リラックス」

こんな風に呟いた所で意味はない。そうわかっていても言わずにはいられない。意識して、両手の握りを緩めていく。

『なっちゃん、大丈夫？』

「大丈夫。何とかいけそう」

頭の右斜め上に繋がったという感覚が通る。鼓膜を震わせる感覚もなく、僅かにノイズを含んだ音が意識を通る感覚には未だに慣れない。

これは一体、どういう技術なんだろう？といつもと同じ疑問を浮かべながら、青野 菜月は言葉を返した。

「きーちゃんこそ大丈夫？」

無駄な言葉だな、と思いながら、菜月は言った。きっと彼女は、斎藤きいろはいつもの無表情をほんの僅かだけ笑みの形に歪めているのだろう。

それがわかっていても、中学生のきいろに気を使わせ続けるのは、ほんの少しだけ残っている菜月のお姉さんとしてのプライドが許せなかった。

『ん、問題ない』

「よし、じゃあ機体立ち上げちゃおうか」

『ん』

七つあるコンソールを、順番に叩くようにしてセットアップを開始。始めは立ち上げるだけで苦労していたが、今は目をつむっていても出来る。

それだけの事はしてきたし、それはきっと自分の力になっているはずだと菜月は信じようと思った。

コクピットに明かりが灯っていく。

前後左右に取り付けられたモニターが、外の景色を映し出す。

操縦桿で機体を操作し、立ち上がらせれば、視線の高さには杉によく似た木々の頂点。

少し高所恐怖症の気がある菜月からすれば、この高さは身が竦む。

「そついえば赤矢は？」

モニターに小さくきいろのバストアップの映像が映る。長いサ

ラサラの黒髪に、人形のように整った顔。しかし、への字に結ばれた口元が人形のような印象を裏切っている。

きいろの淡いイエローのパイロットスーツ。きいろの綺麗な身体ラインを浮かび上がらせ、非常に羨ましい。この胸についている不格好な塊は、あまり綺麗なラインを作ってはくれないのだ。

「ああ、兄さんなら」

「さあ、皆さんこんにちは！」

きいろの声を遮るように、ハイテンションな男が映し出された。

普段着なら悪趣味としか言いようのない、キラキラ光るラメ入りのスーツが目にも痛い。

「バーチャルリアリティ技術はついにここまで来た！ 発表当初から、そう言われ続けて早三年。まだまだ当社がナンバーワン！ これからもウロボロス社の誇るVRMMORobotアクションRPG『バーサスゴッド』ご贖願お願いします！」

マイクの音量が最大になっているのか、狭いコクピットに自画自賛がぐわんぐわんと響く。

言っている事は確かに間違いない。ゲームセンターなどに設置された大型筐体売り上げランキングは、三年連続一位を達成している。

そのあまりの人気は、約一億円もする筐体を自宅に導入した猛者を産み出すほどだ。

後続のゲームを発表から三年経った今も上回る、圧倒的なまでに美しいグラフィックと、リアリティのあるロボットバトルは普段、ゲームをしない菜月もきいろに誘われて、始めてしまえばハマってしまうほど。

「今月もやってまいりました。 Aランク昇格戦！」

多くはないお小遣いから、一回五百円を捻り出してやっとここまで来た。

初心者狩りに弄ばれ、同格の相手にボロ負けして、何度やめようかと思つたかわからない。しかし、それでも菜月はこの場にいる。その事だけは、しっかりと自分を認めてあげようと思つた。

「ルールは簡単！ 最大三人までのチームで、八チームでのバトルロイヤル。最後に生き残つたチームがAランク昇格です！」

まあそれはともかく負けても仕方ないよね、と菜月は思い直した。肩からふつと力が抜ける。

Fランクから始まり、Cランクまではするすると上がる。 Bまでは努力次第で何とでもなる。

しかし、Aランクはこの月に一度のバトルロイヤル形式の昇格戦を勝ち抜かなければならないため、途端に難易度が跳ね上がり、万年Bランカーチームは大量にいる。単純計算で八分の一。

しかし、単純な腕だけではなく、他のチームから狙われないようにする立ち回りも必要になってくる。

「きーちゃん、最初は目立たないように様子見しようね」

菜月の言葉に、きいろはそつと目を逸らした。

「……何そのリアクション。 って赤矢はどこ！？」

司会者の言葉で中断されていた問いを思い出した菜月は、辺りを慌てて見回す。

木々に囲まれた中でも、それは非常にわかりやすい。煙突のよ
うに長い、木々の上に筒先が飛び出るほどに長大な大砲を空に向け、
どう見ても分厚い鈍く輝く銀色の装甲を持った戦車。きいろの機
体だ。

「赤矢はどこに行ったの!？」

嫌な予感がした。普通にログインしているはずなら、同チーム
は視界の届く範囲に配置される。しかし、辺りを見回してももの機
体しか見当たらない。

「兄さんなら……」

「ちょっと回線乗っ取らせてもらっぜい」

司会の姿がプツンと切れると同時に、新しい映像が浮かび上がる。
真っ赤な髪と鋭い目つきがやたらと印象に残る男の姿。まだ肉
付きのしっかりしていない肩には、学生服を羽織っている。

ただでさえ明らかに夕チの悪そうな顔付きだというのに、更に不
愉快なにやにやとした笑いが乗り、一目見て彼と進んで付き合いを
持とうとする者はなかないだろう。

しかし、

「何やってんのよ、あんた!？」

斎藤赤矢のチームメイトにして、幼なじみでもある青野 菜月か
らしてみれば放っておけるような状況ではない。

「よう、菜月。 ちょっと黙ってる」

「あ、このバカ!？」

赤矢の特技はゲームとハッキング。完全に回線に乗っ取った赤矢は、菜月の通信回線を切ってしまった。

きいろとの通信も出来ず、菜月に出来る事は赤矢の暴挙を、ただ黙って見ている事しか出来ない。

「Aランク昇格戦に参加のクソの皆様、こんにちは！ 本日は我々、チームSUNZU Riverのためにお集まりくださり、誠にありがとうございます！」

赤矢の挑発的な演説が始まった。耳を塞ぎたい気持ちを抑え、必死に機体のセッティングを変更していく。

手にしていた機体全体を隠せるような巨大なシールドを、背中にマウント。きいろの戦車もすでに砲身を水平に戻した。垂直から水平まで動く、現実の戦車では有り得ない砲身だが、そんな事を気にしている暇はない。

「今からワタシ達、SUNZU Riverの虐殺ショーを始めさせていただきます」

破壊力を重視したバズーカから、弾数だけはい多いマシンガン二丁へと変更。近接戦闘用のサーベルをマシンガンの予備弾倉へ。

カウント3。長い付き合いは、この後の展開を菜月にたやすく予想させる。

「それでは貴様らがおつ死ぬまでの短い間、存分に楽しみやがってください」

カウント0。いきなりのゲームスタート。セッティング変更

は唐突に打ち切られた。

「きーちゃん！」

「うん」

通信回線が復活。 自分の機体をきいろの砲塔の上に、膝立ちの姿勢で載せる。

すでに暖機を始めていたきいろの戦車は即スタート。 キャタピラの代わりにホバー方式の戦車は、初速は遅いが一度走り始めれば二足歩行の機体とは比べ物にならないほどに速い。

「行くよ、シルバー」

菜月の機体に乗せたせいで、普段より鈍い加速となったきいろの機体、シルバー号が動き始めた。 そのじりじりとした加速は菜月の焦りを生むが今更、降りるわけにもいかないし、菜月独りで逃げるつもりもない。

「来た！」

菜月の機体のレーダーに反応。 赤矢の挑発のせいで、全方位から、

「ミサイル！ えっと………凄い沢山！？」

空を埋め尽くすような、木々にぶつかるたびに爆発し、その爆発の後ろからも大量に。 上からも横からも、数え切れないほどのミサイルが飛んで来る。

「赤矢のバカあ!?!」

「バカとはなんだ! あ、筐体に入るまで、あと五分くらいかかるから頑張つて生き残れよな」

赤矢ののん気な言葉に耳を貸す事なく、菜月は両手に持ったマシンガンで、シルバー号の後ろから迫るミサイルをとにかく撃ち落とす。射撃はあまり得意ではない菜月だが、とにかく撃てば当たるほどの数が飛んでくる。

きいろも砲塔の横に取り付けられた二門の機銃を乱射しているが、まったく間に合っていない。

「きーちゃん、もう無理い!?!」

「なつちゃんは諦めが早い。しっかりと掴まって」

全方位から迫るミサイルは一瞬にして、二人の対応力を飽和させる。しかし、ハンドルを大きく切ったシルバー号は、その大きな尻を思い切り振った。

「正面、撃つて」

「わかったあ!」

きいろの冷静な声に、菜月は泣きそうになりながらも、反射的に従う。直撃ギリギリの距離まで近付いていたミサイルを撃ち落とせば、至近で爆発。

その爆風は尻を刺された馬のように、シルバー号を加速させる。

速度と頑丈さを兼ね備えた走りは、通った跡をハリケーンでも起きたとは思えない有り様に変える。木があるうと岩があるうと、

突っ込めば砕けるのだ。

「うわあ！？ 腕が吹っ飛んだよ！」

「二人とも粉々になるよりはマシ」

爆風に巻き込まれた菜月の機体はマシンガンが高熱に炙られ、中の弾薬が爆発。右腕と正面装甲の一部が破損。

それに比べて、遥かに厚い装甲のシルバー号は、僅かに煤に汚れただけだ。

何となくやり切れない物を感じながらも、まだ追跡してくるミサイルを菜月は残った左腕に持ったマシンガンで、叩き落としていった。いきなりの大加速で、かなりのミサイルのロックを外したが、それでも大小三十ほどが着いてきている。

「正面、距離七〇〇。 敵三機くらい！」

「報告は詳しくして」

シルバー号に一切のレーダーは積まれていない。と、いうよりもこのチームにレーダーを搭載している機体は菜月のみだ。ミサイルを撃ち落としながら、必死にレーダーを確認する。

「え、えっと、固まってる！ とにかく固まってるよ！」

「……そう」

「無理だよ、射撃と管制を同時なんてさ！」

「それより撃つよ」

と、きいろが言った瞬間には撃っていた。

音というより、それは振動としか感じられなかった。身体を震わせる轟音。僅か二二〇〇の距離。菜月の思考が追いつかない時間の中で着弾、三発。

レールガン方式の砲撃は異常としか言いようのない連射を可能にする。フルに連射をすれば、二秒で弾薬が尽きるほど。

その速射性と一瞬で森を更地に変えてしまうだけの爆発力は、二足歩行型の機体が中心のバーサスゴッドの中で、シルバー号は最も人気のある戦車型の一つだ。

「二機撃破！ 残り一機は」

「目の前、轢く」

恐ろしい宣言を聞いた、と思った瞬間、あまり聞きたくない類の激音。レーダーから進路上に敵影無しの報告あり。

「……いやさ、いいんだけどさ」

「何？」

アクセルを緩める気など一切無かったであろうきいろが、菜月には恐ろしい。昔はあんなに優しい子だったのに……と嘆くと同時に、追ってきたミサイルを全弾撃墜。

「よしー」「あ、いめん」

声は同時だった。

ごっん、と鈍い音が背中から聞こえた。何？と考えるより、身

体は勝手に操縦桿を操作し、機体に受け身を取らせていた。

「木が」

普段は無感情なきいろの声色に、わずかに申し訳なさそうな声が乗っていた。

オブジェクトとして配置されている木を、自然保護団体がマジ切れしそうな勢いで轢いていたきいろだが、シルバー号に轢いた木を乗り上げさせる事はなかった。

しかし、猿も木から落ちる、とでも言うべきか。さすがに木と敵の機体を轢くのは勝手が違ったのか、敵を轢殺した影響は僅かにシルバー号の安定を奪ってしまい、それまでコントロールして薙ぎ倒していた木が車体に乗り上げ、菜月の機体に当たってしまった。背中に盾を回していたお陰で、ダメージは少ないが問題が一つ。

「あれ、これ敵のど真ん中じゃない？」

馬から落ちた間抜けを始末しようと、残っていた敵全てが菜月に向かっていた。

頼りになる味方は、すでに遙か彼方。シルバー号は最高速度は速いが、初速と減速と旋回性が非常に悪い、直線のハイウェイ専用。つまり、きいろが戻って来るまで、かなり時間がかかる。

「詰んだっばい!？」

片腕を無くしている上、菜月の機体は元々しょぼくれている。バーサスゴッドは一チームにつき、千のコストが与えられており、その中で構成しなければならぬ。

きいろのシルバー号が四百、赤矢が五百、菜月は百。

量産機の傑作（という設定）であり、豊富な武装（ただし、最大

の攻撃力を持つバズーカ、しかも最大弾数十発⇨高コスト機の牽制用の副武装並みの攻撃力)を持つ機体。
その名を、

「が、頑張ろう、ザム！」

別名、初心者殺しの動く棺桶である。

勝負はまだまだこれからだ

ザム、という機体にまつわる逸話が多い。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗ってみたら、やたら多い起動シークエンスで動けないままに終わった。バーサスゴッドはこのような場合でも、遠慮容赦なく敵から攻撃が来る。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗ってみたら、装甲が薄すぎて僅かにかすっただけでザム大破。バーサスゴッドではきつちり全て避けてもらう事で、プレイヤーに対応してもらう方針だ。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗ってみたら、悲しくなるほどの豆鉄砲で、全弾相手に当てても落ちなかった。バーサスゴッドはそのような場合、最初から上手く相手の装甲の隙間に当てるか、武器を捨てて素手での戦闘を推奨している。

露骨に地面から顔を出し、丁寧にデコレーションされている地雷それがバーサスゴッドでのザムの一般的な評価だ。産業廃棄物ですらなく、ネタ以外では誰も使わない。

しかし、初めてプレイした時から青野 菜月はザムに乗り続けている。

癖の無い操縦感は菜月の思った通りの動きをするし、物足りないどころか、動いている気がしないとされる加速はビビリの菜月でも怖くない。弾に当たりそうなら、最初から撃たれないような立ち回りを心掛ければいい。でも、さすがに攻撃力の無さだけは何も言えない。

菜月の乗っているザムは、百戦連続で同機体に乗り続けたポーナズで、指揮官専用ザムにアップグレードされている。

丸っこい頭に一本、ひよろつとした角のようなアンテナが立っていて、貧弱なフレームは僅かに剛性がアップ。推力も雀の涙ほど増えた。レーダーの性能がバランス型の高コスト機並みに上がった。

た事だけが救いだ。

全体的に丸みを帯びたザムのボディは何とも可愛らしく、菜月は携帯のストラップにしまったほどだ。

こんなにもザムは可愛いのだから、もっとザム乗りが増えてもいいと思うが、日本全国を探しても指揮官専用ザムを持っているのは現時点で青野 菜月ただ一人。

通常、緑のザムが艶のあるパールホワイトになっていて実質、菜月専用ザムとなっている。

カラーリング設定はAランカーのみの特権だが、Cランクに上がった時点で菜月は専用カラーリングを持つザム乗りとして一躍有名になった。ネタ的な意味で。

日本で最もザムを愛している女だと、絶対的に認められている菜月ではあるが、

「さすがにこんな状況、ザムじゃ無理！」

赤矢の挑発の怒りが全て菜月めがけて飛んでくる。 砲弾、銃弾 選り取り見取り。

既にマシンガンは捨てていた。 上手く装甲の隙間にも当たらない限り意味がない牽制にもならないマシンガンより、シールドを手にした方がよほどマシだ。

一瞬の間もないほど、シールドにがつっんがつっんとぶつかる音が響き続ける。

撃ってくる敵と菜月の間に別な敵を挟み込むように、背中のパニアを必死に吹かして移動し、何とか少しでも攻撃の手が緩むように手を打ち続ける。

元々、バトルロイヤルだ。 下手に菜月に接近戦を仕掛けて仕留めようとすれば、他のチームから菜月ごとまとめて撃たれかねない。 しかも、ザム相手に弾薬を使い切る事も後を考えれば不利だ。

その二点が何とか菜月の撃墜を防いでいた。

伊達にザムでBランクに上がったわけではない。ギリギリの拮抗を作り出す駆け引きと嫌になるほどしつこい防御は、菜月が沢山の撃墜の中から学んだ事だ。

「じれったい、ですわね」

「うえっ!？」

しかし、その駆け引きもあくまで、相手が乗ってくれているからだ。僅かに踏み越える誰かがいれば、菜月の小賢しい駆け引きなどご破算となる。

モニターにポップアップ。セツトに時間かかっているんだろう、といつも思うドリルのような縦ロールが印象的な女の姿。

「鳥井トリノ!」

「菜月さん、今日こそアナタを落とさせてもらいますわ! ウィンドノーツの力、見るがいいですわ!」

同時期にBランカーとなったトリノのチーム『ウインドノーツ』と、菜月のチーム『SUNZU River』は公式戦だけで三度、通常戦だけで八度目の対戦が組まれていた。

そのたびにエースであるトリノから、必死に生き延びて菜月が時間を稼ぎ、残り二機がきけると赤矢に撃墜されるパターンを繰り返している。十一戦十一勝、被撃墜〇というパーフェクトな状況だ。しかし、鳥井トリノは甘くない。その事は菜月がよく知っている。

「あんたの力はよくわかってるから、もう来ないでよ!？」

「問答無用です！」

ウインドノーツの基本戦闘パターンは、シンプル極まりない。三機の空戦用機体『ウインドノーツ』による一撃離脱戦法だ。

「止めてみなさい、わたくしの終生のライバル！」

「勝手にそんなものにしないですよ!？」

ウインドノーツは空を飛ぶために装甲がザム並みに薄い。しかし、ザムは飛べない。

その装甲はザムのマシンガンでも撃ち抜ける程度で、いつもの対戦では適当に牽制しながら必死に逃げ惑うという方法が出来た。

それも今はマシンガンを捨てたせいで出来ない。

トリノのウインドノーツは既に菜月の頭上を取っている。高度三〇〇〇。プテラノドンによく似た、黒地に金のラインが入った機影が、翼を折り畳んだ。

重力にその身を預け、全力でバーニアを吹かす。一瞬で高度を千縮めたウインドノーツ。菜月のザムは、正面の十二機からロツクオンされていると警報を鳴らした。

ウインドノーツのエースであるトリノごとまとめて撃とうという構えだろう。チーム・ウインドノーツはトリノが一人でチーム撃墜数八割を稼ぎ出すワンマンチームだ。その腕は一人ならAランクに上がっているだろう。

銃弾は恐らくシールドで止められる。ザムは壊れてもシールドが壊れた事はないほどだ。

しかし、水平方向にシールドを向ければ、頭上から絶対にウインドノーツに仕留められる。

ウインドノーツにシールドを向ければ、ひよっとしたら、もしか

したら、万が一、生き残れるかもしれない。

そして、ここで下手に動けば周りにいる機体から無防備な背中を撃たれ、撃墜されてしまう。

菜月を仕留める事だけを見れば、トリノは最高のタイミングで動いていた。昇格を逃してでも、菜月を仕留めるという覚悟。

「ごめんなさいね、皆さん。わたくし菜月さんを倒さなければ前には進めませんの!」

「いいえ、我々は」

「トリノ様の御心のままに!」

取り巻きA、Bとしか菜月は覚えていないウインドノーツの二人が何かを言っているが、そのよくわからない忠誠心には引くしかない。

「わたくし達の想いを受け止めなさい、菜月さん!」

「すっごい迷惑!」

覚悟を決めた。菜月はザムの残された腕を頭上に掲げた。少しでも生き残りを図ろうと、シールドの角度を斜めにし、力を受け流そうとする。

ロックオン警報はやかましいくらいに鳴り続け、次の瞬間にはザムは蜂の巣になる未来が待っている。

このままでは、だ。

レーダーに映っていた機影が、一つ消えた。

「裏切りだ！ 一人やられた！」

その声は菜月には聞き覚えがあった。 赤矢の声だ。

「誰だ！？ 誰がやった！」

「お前らか！」

怒りにより結び付いていた結束は一瞬にして崩壊。 攻撃力を失ったザムなどに照準を向けている暇はない。

互いに銃口を向けあう彼らは即発砲。 ザムを追うために接近していたせいで、中近距離戦とでも言うべき正面からのインファントが開始される。

銃弾を避けられるだけの距離もなく、阿鼻叫喚の相討ち地獄。

「だけど、そんな事は知った事じゃありませんのオオオオオ！」

「いやあああああああ！？」

ウインドノーツの大加速パワーダイブは、自らを弾丸と化す一撃。 激突、トラックが壁に正面衝突したような破壊音。 しかし、トリノは手応えを感じていなかった。

刹那の交差の後は再び離れる距離がある。 トリノが背後を振り返れば、左腕が引きちぎられ、右足も半ばから折れたザムの無残な姿。

それでもザムの健在を示すマーカーは点ったままだ。　まだ菜月は健在。　立てもしないだろうが。

「トドメ、行きますわよ！」

「させない」

「あ、あらあ！？」

どこからか飛んできた機銃弾が、旋回に入ろうとして速度を落としたウインドノーツの翼を掠める。　バランスを崩したウインドノーツはそのまま墜落コースへ。

「お、覚えてらっしゃい！」

「うるさい」

いつの間にか戻ってきていたきいろとシルバー号は砲身の角度を上げる。

「鴨撃ち、もらう」

銃火が見える場所へ大口径の砲弾を乱射。　必死に戦っていたチームの大多数は正面の敵に気を取られ、避けられずに哀れ木っ端みじん。

「快感」

と、棒読みできいろは言った。

「なんなんだ、このふざけた展開！」

きいろの砲弾から運良く逃れた者も何人かいた。これで三度目のAランク昇格戦の彼は、チームの仲間達と必死に特訓してきた。

「この試合が終わったら、俺……転校するんだ」

そう言った仲間は何も出来ないまま、どこからか飛んで来た砲弾に吹き飛ばされた。最高の仲間達と最後に最高のゲームをしようぜ。そう誓ったはずなのに。

「ちくしょう、最悪じゃないか！」

「おい、待てよ。そいつは聞き捨てならねえなあ」

「誰だ!？」

レーダーには反応がない。どこか遠くから通信が入ったのか？
彼が考えた瞬間だった。

「逆に考えるよ」

彼の乗った機体の胸に穴が空いた。何故?と思った瞬間、何も無かった空間に赤錆のような不気味な色が浮かび上がった。

「ステルス!？」

「今はそんな事はどうでもいい。まずは俺の話聞いて」

胸から腕が飛び出していた。細い、それでいてひよろりと長い腕だ。

その腕の先には、不釣り合いなほど巨大な五本の鋭い爪。更にその爪先には、

「おい、待てよ。それは俺のエンジン……！」

「こつこついう時は……勝負はまだまだこれからだ。面白くなってきたぜ！ってな」

爪の先に刺さっていた機体のエンジン。器用に指先の動きだけで、その手にすっぽりと収めると、

「まあそいつも俺とラスティネイルの前じゃ、何の意味もないんだけどよ」

ぐしゃり、と潰された。

「この……！ 卑怯者！」

腕が引き抜かれ、支えと動力を失った機体が崩れ落ちていく。

「そいつは最高の褒め言葉だな」

崩れ落ちる事すら許される事なく、斎藤赤矢のラスティネイルの爪が振るわれた。

「兄さん」

「おう。 どうした、きいろ」

にこやかに敵の機体を切り刻み終わった、赤矢のラスティネイルに通信が入った。

真っ直ぐ立っていても、腕が地面に着くほどの異形は、極限までレーダーに捉えにくい、光学迷彩が乗りやすい物質で作られている。しかし、その代償に絶対的な脆さを得てしまった。

下手な射撃武器を持てば反動だけで碎けるフレームと、どんな装甲も一撃で貫く馬力、そのせいで繊細に操作しなければ歩くだけで手足が折れる超ピーキーな操作系、格好よさも可愛さも感じられないデザインはバーサスゴッドに登場する機体の中で、三年連続で不人気ナンバーワンとなっている。

「敵は残り三機前後のようです」

「よし、じゃあいつちよ俺達、兄弟の絆の力とやらを見せてやるとすっか」

何が楽しいのか、ギャハハと下品な笑いを上げる赤矢に、きいろは何の感情の色も乗せずに言った。

「はい、兄妹連携です」

「いつもの通り、お前が陽動」

「兄さんが仕留める、です」

十分後、勝者を告げる声が参加者に告げられた。

勝者SUNZU River。被撃墜〇。撃墜数十三の堂々たる戦績でのAランク昇格である。

「いつもこんな感じですよ」

「ね、しよ？」

「だから俺は疲れてるんだって……」

「いつもそう言って付き合ってくれないでしょ。今日だけ。今日だけ付き合っつてよ」

「……兄さん、このままだとずっと言われ続けます」

「うん！ 私、ずっと言うよ！ ずっと言うよ！」

「うぜえ……わかったよ」

「やった！」

三人はまだバーサスゴッドの筐体の中にいた。モニターにはつらつらと文章が並んでいる。

『特殊グラウンドクエスト・「神への挑戦」が発生しました。条件・Aランク昇格戦で被撃墜○』

「俺、あんまりCOM戦好きじゃねーんだけど」

「私はたまになっちゃんに付き合っつてやっています」

バーサスゴッドはコンピューターを相手にするオフライン専用モードも用意されている。こちらのモードもウロボロス社が力を入

れて作っているだけあり、派手な演出がプレイヤーを楽しませてくれる。

オフライン専門のプレイヤーもいるほどだが、発売から三年経った今でもクリアされていない。

「あ、ちよつと待つてね。 Wikiに書き込んでから」

菜月はそう言うつと携帯を操作し、攻略サイトに書き込みを始めた。グランドクエストと呼ばれるメインストーリーを楽しむクエストだけでも、現在わかっているだけで六千を超える。

様々な条件により、ルートが分岐しストーリー自体が多彩に変化するのだ。

菜月は赤矢ときいろがいなければ、延々とクエストを進めている。

「なんつーか、テンション上がんねえんだよな、クエストって」

「クエストだとザムのマシンガンでも相手を倒せますから」

「……対人戦の憂さ晴らしかよ」

「終わったよー！ あはー、三人でクエストとか久しぶりだよねえ。えへへ、赤矢がいるのっていつぶり？ いつぶり？」

テンションが上がりきった菜月に、赤矢のテンションは地の底まで下がりきった。

「なんだよ、そのノリ……」

「初めて特殊ルート見つけたんだもん！ Bランク以下だと、もう探し尽くされて見つからなかったから、Wikiに書き込み出来な

かったの！ すっごいしてみたかったの！」

「さよか」

普段は傍若無人を絵に書いたような赤矢だが、やはり彼も男である。興奮した女性に逆らう愚かさは、よく知っている。

言葉少なに返事をするだけに留めた。

「よし、じゃあクエスト受」

「待て、菜月」

しかし、喜び勇んでクエスト受注を選ぼうとした菜月を、赤矢は止めた。

「え、やっぱりやめたとか？」

「今更そんな事は言わねえよ。まあ俺の話を聞け」

真剣な顔をしている赤矢に菜月は唾を飲んだ。さすがにさっきの態度は高校生としてあれだったか、と落ち着いた頭で思い返した。普段からろくでもない事ばかりしている赤矢に、説教の一つでもされた日には一生の恥だ。

「俺が受注ボタンを押す」

右手の親指でわざわざ自分を指し、妙にいい顔をしながら赤矢は言った。

「やだ」

先ほどまでの反省はなんだったのか。しかし、菜月にも譲れない事がある。

「私が押すの」

「こつというのはリーダーの仕事だろ」

「はあ？ あんたがリーダーとか有り得ないでしょ」

「は？ じゃあ菜月、お前がリーダーなのか？ それこそ有り得ないだろ」

二人の意地と意地がぶつかり合う。それは端から見れば、馬鹿らしい事だ。

しかし、菜月には菜月の言い分があり、赤矢には赤矢の言い分があった。

『あの、すみません。プレイするなら早くして欲しいんですけど……』

「ごめんなさい」

ゲームセンターの店員から怒られたきいろは、受注ボタンをぽちつと押した。

「あ、きいろ！？」

「きーちゃん！？」

「二人とも大人気ないです」

年下の女の子から、ぐうの音も出ないほどの正論を言われた二人は黙った。

「それより機体立ち上げを始めましょう」

「はい……」

ぶすくれる菜月に、

「初めてなっちゃんが見つけた特殊クエストなんだよね」

「そっだよ！ あはー、頑張って色々書き込むために、調べなきゃね！」

再びテンションを上げた菜月は、猛烈な勢いで機体の立ち上げを始めた。

「兄さん」

「あ？」

きいろは菜月側への音声送信をカットした。

「私は兄さんがリーダーだってわかってます」

だるそうにしていた赤矢の表情は一変。にへらとだらしない笑みを浮かべた。

「だよな、さすがきいろは俺の妹だ。よく俺の事がわかってるぜ！」

「はい」

きいろは世の中には言わなくてもいい事があるのを、よく理解していた。

「そういえば赤矢、ウロボロス社にハッキングしたとか言ってたかっただ？」

立ち上げが終わり、モニターと機材に明かりが灯ったコクピットの中で、菜月がふと思いついたかのように言った。

「ああ、やった」

「……え、それって大丈夫なの？」

「あの会社、盛り上がりゃ大抵の事は許してくれんだよ」

「そんなのでいいんだ」

「あとハッキンググループも提出してきたからな」

企業だけではなく、警察などでもハッカーを雇い、ハッカーをする事はよくある。赤矢のように趣味でハッキングをするが、特に被害を出さないハッカーは被害届を出して逮捕させるより、内に取り込んだ方が役に立つのだ。

「よくわかんないなあ」

「いいから気合い入れ直せよ。クエストだからって、俺がリーダーのSUNZU Riverが負けるのは許せねえ」

「え、だからあんたがリーダーって」

「なっちゃん、始まる」

その場所は荒野だった。草木がまばらに生えているだけ。起伏もなく、シンプルな戦場。

「あれ、状況説明とかなし？」

通常、クエストを受けると状況説明やちょっとしたストーリーが流れるのだが、何も起きない。

菜月のお気に入りキャラクターであるお髭が可愛い司令官が出てこなかった事に、少し寂しさを覚えながら、菜月は行動を開始する。

前の戦闘での破損が修復されている事を確認した菜月は、ザムを立ち上がらせた。特殊クエストという事で、昇格戦の状況を引き継いだままという可能性も考えていたのだ。

さすがに四肢がもげ、武器もシールドもないまま戦場に放りこまれては泣くしかない。

「さーて、敵はどこかなー」

リーダーを操作しようとする菜月に赤矢が声をかけた。

「菜月、後ろ後ろー！」

「え？」

ザムを振り返らせてみれば敵、敵、敵。すでにアサルトライフルを構えた機体が百以上。レーダーを見てみれば、敵影を示す光点で真つ赤に染まっている。

ドラム缶に、蛙に似た丸みを帯びた頭を付け、ぞんざいに取り付けられたとしか思えない短い手足。クエストモード専用の機体『フロッグスケルトン』

何がスケルトンなのかはよくわからないが、ミルクィブラウンの機体色から来ているのだろうと、菜月は勝手に思っている。

ザムのマシンガンでも貫通する薄い装甲で、初心者でも安心な雑魚だが、これはさすがに数が多過ぎた。

「なにこれー!？」

「なっちゃん、早く逃げて」

きいろの声に従い、フロッグスケルトン部隊が集まっている方向きながら、菜月はスラスターを吹かし、後ろ向きに滑空を始める。しょぼくれた推力だが、それでも歩くよりは早い。

「あれ、ところでなんでそんなに後ろにいるの？」

いつの間にか菜月の後方、距離七〇〇にシルバー号。赤矢のラストネイルはステルスを開始したのか、どこにも見当たらない。

「……基本の戦闘パターン」

「どづいつ事……?」

フロッグスケルトンがここに来て、初めて動きを見せた。手にした銃口は一点を向く。

「あ」

「ごめん。頑張つて生き延びて」

ラストイネイルはどこにいるかわからない。シルバー号を狙つても、距離が遠くフロッグスケルトンのアサルトライフルでは、その装甲を貫けないだろう。

つまり、フロッグスケルトンの狙いは一点になる。

「私、囿!？」

菜月の悲痛な叫びと同時に、フロッグスケルトンのアサルトライフルが一斉に火を吹いた。

いっつもこんな感じです(後書き)

ご意見、感想、評価、お気に入り、不満その他もろもろお待ちしております。

ゲームだよ、そうだよ、

まるで扇のような形になっていた。外縁のフロッグスケルトンから、要の菜月へと間断無く銃弾が撃ち込まれる。

右へ左へ、ちまちまと移動しながら菜月は必死に撃ち返した。

シールドの影に隠れているせいで、しっかりと相手を見る余裕がなかったために、とりあえず相手のいる方向に目掛けて適当にマシンガン撃っているだけだ。

何の因果でザムのような弱小機体で囿をしているのか、と菜月自身も思わなくはないが、実のところチームSUNZU Riverには他の選択肢はない。

きいろのシルバー号は接近戦では戦えず、赤矢のラスティネイルは接近戦以外は出来ない。

その点、ザムなら一応は射撃武器を持ち、一応は接近戦用の武器もある。全てが非常に低レベルで纏まった良機体、それがザムである。

「きーちゃん、一気にどかーん！っていけない？」

「無理」

シルバー号がいくらか火力重視であろうと、百機以上のフロッグスケルトン部隊を吹き飛ばせるほどではない。相手もただの木偶ではないらしく、散開して一機ごとに距離を取っている。

相手が三機編成の対人戦の場合ならかまわないが、一山いくらのフロッグスケルトンを砲弾一発と引き換えにするには弾数が足りない。

「なっちゃん、頑張って引き付けて」

「もう無理！」

「だよね」

二機か三機ほどで菜月の横に回り込もうと動く小部隊が度々、出てきている。正面からならザムのシールドは、シルバー号の砲撃すら耐えるが横から無防備な脇腹を撃たれてしまえば、濡れた和紙を千切るようにして落ちてしまうだろう。

小部隊が出るたびにきいろは機先を制して砲撃を加えるしかない。貴重な砲弾を使うしかない。

「これがNPCの戦い方？」

「だよね、何か違うと思う」

菜月は言いようのない違和感をずっと感じ続けていた。VR技術が発達しても、リアルタイムで相手に合わせた戦術をコンピューターが考えるのは難しい。

しかし、目の前のフロッグスケルトンは確かに戦術に似た何かを駆使している。

「少し前に出る。機銃で落とす」

「大丈夫？」

「大丈夫、相手の射程には入らない」

きいろが苛立っているのに、菜月は気付いた。

ベトナム戦争で車に備え付けられた機銃を使い、長距離から狙撃

したという記録がある。シルバー号でもフルオートから、三発だけを撃つ三点バーストモードにすれば、無駄撃ちする事なく狙撃が出来て、砲弾を節約する事が出来るはずだ。

「……無理しないでね？」

しかし、菜月は違和感が消えない。何か当たり前の事を見逃しているのではないか。そんな気がしてならないのだ。風が吹いていた。風は東から西へと流れている。

「大丈夫、狙撃は得意」

シルバー号が前に出ると同時に、再び三機が一塊となって前に出てきた。砲撃を加えれば、まとめて吹き飛ばせるチャンスではあるが、きいろは足を止めて機銃を使う方を選んだらしい。必死に短い足を動かし、距離を詰めようとするフロッグスケルトンに、きいろは慎重に照準を合わせる。

距離は敵のアサルトライフルでは届かないが、シルバー号の機銃ならぎりぎり届く距離。

「当たる」

きいろにはその確信があった。一方的な鴨撃ちにプレッシャーを感じるはずもなく、引き金を引いた。

砲身の横に備え付けられた機銃から、三発の銃弾が放たれる。

その凶悪な威力は当たれば、フロッグスケルトンを無残な姿に変える事だろう。

「嘘!？」

しかし、外れた。撃った瞬間、必中の確信を得ていたきいろは一瞬の忘我に陥る。

弾が何かに流されるように曲がった。バリア装置を持っていないはずのフロッグスケルトンが、どうやって？その疑問は行動に遅滞を生んだ。

「きーちゃん、下がって！」

菜月の言葉は、菜月に出来る最速だっただろう。しかし、全ては遅かった。

フロッグスケルトンはこれまでアサルトライフルしか持っていなかった。撃破済みの機体も確かにそうだった。

だが今回、前に出てきた三機は背中にバズーカを隠し持ち、このタイミングで両腕に構えた。

「……………っ！」

足を止めていたシルバー号は動けない。発射されたバズーカは三発ともがシルバー号への直撃コース。

必死に機銃でバズーカを撃ち落とそうと乱射。一発は機銃の弾幕に捉える事に成功、爆散。

しかし、

「きーちゃん！」

残り二発はシルバー号の車体に見事に命中した。黒々とした煙を上げるシルバー号に向かって、菜月はザムを飛ばした。

いつもなら安心感すら得る遅々とした加速が、今に限っては苛立ちの元だ。

二射目を撃ち込もうと、狙いを安定させるため膝を付いた小部隊

の真ん中に、ザム虎の子一発こっきりの手榴弾を投げ込む。地面にぶつかり、わずかにバウンドした手榴弾は、一瞬の後に破裂し、三機を吹き飛ばした。

「きーちゃん、無事!?!」

きいろの機体の状況を、菜月は聞いた。

バーサスゴッドはゲームだ。最悪の場合、シルバー号ときいろを見捨てて菜月一人逃げる必要があるかもしれない。ゲームなりの合理性がある。

しかし、それでも菜月とザムは、シルバー号の前に立った。

「無事じゃないかも……」

通信に出たきいろの頭から、真っ赤な血が流れ出していた。

「どうしたの、それ!?!」

「当たったら凄い揺れて……頭ぶつけた」

脳震盪でも起こしたのか、朦朧としたまま、きいろは答えた。

バーサスゴッドでも多少の振動はあるが、通常はこのように怪我をする振動はありえないはずだ。

「きーちゃん、ギブアップするよ!」

「じゅめん……」

「ゲームより、きーちゃんの方が大事に決まってるじゃない!」

そんな当たり前の事を言うきいろに、腹を立てながら菜月はギブアップのボタンを呼び出し、押した。

「……ごめん」

「ゲームより、きーちゃんの方が大事だもん」

そんな下らない事で謝られるのは心外でもあり、こんな風に怪我をする作りにしたバーサスゴッド、ひいてはウロボロス社への怒りが菜月の声に乗っていた。

特殊クエストは二度と発生しないかもしれないが、大切な友人を怪我させたまま続けようと、菜月はまったく思わなかった。

「今ぞ、突撃イイイイイイ！」

しかし、そんな菜月の怒りなど、吹き飛ばすような大音声が戦場に響く。銃火の中でもはっきりと、機械で増幅された音特有のノイズもなく、野太い肉声が戦場を動かした。

「え、え！？」

菜月の戸惑いを無視して、フロッグスケルトンの大部隊が一斉に動き始めた。

シルバー号の砲が半ばからへし折れている今、確かに敵から見ればチャンスなのだろう。しかし、すでにギブアップはしたはずだ。

「どっついう事！？」

通信の向こうではよほど辛いのか、唇を噛み苦痛を堪えるきいろの姿。目は明らかに焦点が合っていない。きいろは動かせる状

態ではなかった。

いつログアウトが出来るかはわからないが、

「やるしかないじゃない！」

菜月はシルバー号の前の地面にシールドを突き刺した。シールド上部にマシンガンの銃身を寄せ、反動を抑える支えとし、正確な射撃を求める構えを取った。

菜月に必中を期待出来る腕はないが、敵は津波のように押し寄せる雑兵の群れ。

適当にトリガーを引き絞るだけで、避けも防げもしないフロッグスケルトンは数機まとめて撃ち抜かれる。

勝利条件はきいろに三発目の被弾を許さない事。目視でバズーカを構えた相手を集中的に狙っていく。またきいろに怪我をさせるわけにはいかない。

その決意は、あっさりと二十機ほど菜月にフロッグスケルトンを撃破させた。このまま行けば一人でフロッグスケルトンを殲滅出来るであろう。

「うりゃうりゃうりゃうりゃー！……って弾切れ！」

しかし、火力に優れるシルバー号でも、単機で殲滅するのは不可能だった敵の数。津波を多少、砕こうとも何の意味もない。

焦燥感がザムの手元を狂わせ、マシンガンの弾倉を取りこぼしてしまふ。

「落ちて着け落ちて着け落ちて私……！」

腰の後ろから最後の弾倉を取り出し、今度こそ交換に成功。しかし時間にして三秒も経っていない。が、残った三十はいるであ

ろうフロッグスケルトンの群れは、大きく距離を詰めていた。

この弾倉を使い切ってしまったら、次はないだろう。一応、接近戦用のサーベルはあるが、そんな事をしている間にシルバー号が、きいろが撃たれる。

「ど、どうしよう!？」

「こつする!」

真っ赤に染まったレーダーに、青い光点が一つ。突撃してきた部隊の後方に待機していた三十機ほどの塊。そのど真ん中に赤矢は現れた。

「くそつ、避けやがった!」

「殺気が漏れておったわ! しかし、この距離まで近付いてみせるとは見事なり!」

フロッグスケルトンに隠れるようにしていた、雑としか言いようのないフロッグスケルトンとは違い、丁寧な作りの西洋甲冑をそのまま大きくしたような機体が、滑らかなサイドステップで、ラスティネイルの右の突きを避けた。

必殺の一撃を避けられ、大きく体勢を崩したラスティネイルに、西洋甲冑が姿に見合ったランスの刺突を送り込む。

「我が槍、馳走してくれる!」

異常に腕の長い構造を生かし、左腕で地面を突き刺し、その反動でラスティネイルは横に転がる。

「貴様ら、我々を誰だと思っている！ 我々は」

「赤矢！ きーちゃんが怪我した！ ギブアップも出来ない！」

ステルス中は通信が不可能になる。 ステルスを解除した赤矢に、菜月の声がやっと届いた。

「なんだと……！」

赤矢は決意した。

「てめえら皆殺しだ！ ログアウトしたら絶対にウロボロス社も叩き潰してやる！」

「ぬう！？ 戦場で掠り傷で喚きおつて！」

馬鹿の一つ覚えのような右腕での突きが、甲冑の心臓を狙う。だが、その怒りに満ちた突きは、ただただ速い。

「だが、防げぬほどでは！」

「だろうな」

甲冑は両手で構えたランスを突きของ軌道上に乗せる事に成功。しかし、ラスティネイルの腕は一本ではない。

左腕をコンパクトに回し、爪先で、甲冑の両腕を切り落とした。

「何という業物……我が甲冑がこんなにもあっさりと！？」

再度、放たれたラスティネイルの突きは、両腕を失った甲冑に避

ける事を許さなかった。

「おうよ。俺の自慢のラスティネイル、存分に味わえ！」

甲冑の腹の中身は赤。 絵の具でもぶちまけたかのように、辺り一面に赤い色が広がった。

甲冑を仕留めた赤矢は即座に後方へと跳躍。 指揮官と戦っている間、同士討ちを恐れて撃てない。 だが、同士討ちを恐れる必要の無くなった敵は、即座に赤矢を穴あきチーズにしてやろうと銃弾が山のように撃ち込まれるはずだった。

「なんだそりゃ……？」

しかし、赤矢を襲ったのは銃弾ではなかった。 ドラム缶を倒したかのような、がしゃんという音が連続して続く。 残った全てのフロッグスケルトンが、いきなり骨を抜かれたかのように倒れていた。

銃声が消え、奇妙な沈黙が辺りを支配した。

バカもたまには役に立つ

「あ、赤矢……何が起きたの？」

不安げな菜月の言葉に、赤矢は端的に言葉を返した。

「わかんねえ」

指揮官を倒す事がクエストの勝利条件なのか。そう思ったが、それはそれでまた赤矢の中に違和感がある。

バーサスゴッドは確かに優秀なゲームだが、リソースは限られている。どれだけ高性能なCPUを搭載しようと、その分を高度なグラフィックに使う必要がある以上、ゲームに必要な機能は大胆にカットされている。

例えば倒れた敵の残骸だ。敵の残骸一つ一つを拘って作った所でプレイヤーは見ている暇はない。普通は一定時間が過ぎれば消えるはずだ。

動画投稿サイトに投稿されている、AランカーがAランククエストをプレイしてる動画を見た事が赤矢にもあるが、残骸はやはり消えていた。

「……なんだ、この臭い」

「おならでもしたの？」

「うるせえ、黙ってる馬鹿」

「な、なんですって！」

キーキーと喚く菜月を無視して、赤矢は鼻を鳴らした。強い鉄錆のような臭いがする。

「……菜月、少スキいろ見ててくれ」

「う、うん」

菜月の怒りは長続きせず、普段とは様子の違う赤矢に気付いた菜月は、何も言わずに従った。それよりも確かめなければいけない事がある。赤矢は菜月ときいろへの通信をカットした。

「……R18だろ、これ」

先ほど倒した甲冑に近付いて、よく見てみれば腹から腸が飛び出している。甲冑をラステイネイルでゆっくりと切っていけば、中から人の姿。

巨大ロボットと遜色のない大きさの人が、苦悶の表情を浮かべて死んでいた。

「何のジョークだ、こりゃ……！」

立派な髭を生やしたロボット大の人間と戦っている、というのはゲームらしい設定だろう。レーティングは付くだろうが。

しかし、VR技術が発達した今でも臭いを再現する事は難しい。もし臭いを再現出来たとして、わざわざ血と糞便と反吐が混ざったこの酷い臭いを作る奴がいれば、そいつは本物の馬鹿野郎だと赤矢は確信した。

図太い神経をしていると自負している赤矢でも、この臭いの前には嘔吐を必死に我慢する以外に方法はない。

「くそっ……」

これはゲームだ。ゲームだったはずだった。

「菜月、今からそっちに行く」

「……どうしたの？ 顔真っ青だよ？」

「とびつきりのサプライズを見せられたのさ！」

幸い、とでも言うべきか。菜月との通信中に、倒れたフロッグスケルトンを解体し、中を確かめたが生身の巨人は入っていないかった。

少しでもこの場から離れたくて、赤矢は全力でラステイネイルを走らせた。両手を使い、四つ足で走るラステイネイルは十秒もかからない間にザムとシルバー号の前に辿り着く。

「お前、確かマニュアル持ってたよな」

「う、うん……」

「ラステイネイルのハッチの開け方、探せ」

バーサスゴッドは無駄な機能も多い。その中でも最大に無意味なのが、ハッチを開ける方法だ。ゲーム中にそのコマンドを試しても、エラーを起こして一切の機動が止まってしまう。

さすがにそんなネタとしか思えないようなコマンドまで、赤矢は覚えてはいない。

そして、赤矢はマニュアルを読まずに捨て、菜月は読まないくせに取っておく。

「まず膝を着いて、機体を安定させてください」

「おう」

菜月の指示通りに赤矢は操作していく。いつそエンジンを起こした車のように、ラストイネイルの動きが止まる事を祈りながら。

「そして最後にイグニッションキーを抜いてください」

「ああ、ちくしょう……」

「な、何それ！？ 何したの！」

開くはずのないハッチが開いた。ラストイネイルの胸が、ゆっくりと割れていく。

備え付けてあった、ただの雰囲気を出すためだけにあると思っていた縄ばしごを下ろし、約三メートルほどの高さをゆっくりと降りていく。

初めて使った縄ばしごの揺れに苦勞しながらも、赤矢は地面に降りた。

強い風が吹いていた。

同時にきいろが狙撃を外した理由がわかった。一発一発の弾丸への風の影響をシミュレーションすれば、莫大な処理が必要になる。そこまで処理仕切れないバーサスゴッドでは、弾丸は基本的に直進する。

大口径の砲弾は風の影響をあまり受けなかったせいで、きいろは気付かなかったのだらう。

そんな事を考えながら、赤矢はシルバー号の砲塔の上に駆け上った。

戦車の構造はよくわからないが、映画などではこの辺りに……、

「開いた！」

鉄の、血の臭いがむわつと赤矢の鼻に届いた。 さつき見た巨人の死体が脳裏にちらつく。

「きいろ！」

狭いハッチから身体を滑り込ませると、そこは映画で見た気がする戦車の操縦席そっくりだった。

ぐったりとしたきいろを縛るベルトを外すと、座席から引っこ抜くようにして、力のない妹の身体を抱きかかえた。

「兄さん……？」

「ああ、兄さんさ。 何なら証拠に白い手袋でも見せようか？」

「……あは」

きいろの黒髪が血に染まっていた。 きいろを座席から引っこ抜いた時、イエローのパイロットスーツが光に包まれ、セーラー服に変わったのに気付いたが、赤矢の中にそれを疑問に思う余地は残されていなかった。

「目覚ませよ、きいろ！ くそつ、手を貸してくれ、菜月！」

気を失ってしまったきいろを背負うと、赤矢はハッチを登った。

狭いハッチはぎりぎり二人分の隙間しかない。 小柄なきいろでなければ、上手く登れたかわからなかった。

「菜月！ きいろが……ってこんな時に何の冗談だ！？」

パールホワイトのザムが、マシンガンをしつかりと両手に構え、その人間相手には大き過ぎる力を赤矢ときいろに向けている。

日本でただ一人、青野 菜月が持つ指揮官用ザムだ。

菜月はよく可愛いと言っているザムの単眼が、不気味に赤く輝いた。

「菜月、遊んでる暇はねえ！」

「怪我人がいるのか」

ザムの外部スピーカーから聞こえてきたのは、菜月の声ではなかった。

ハスキーな女の声。 甲高い菜月とはまったく違う。

「ごめん、赤矢……。いきなりこの人達に囲まれちゃって……」

視線を移せば、もう一機見慣れた白いザムの姿。 その後ろには緑のザムがマシンガンを突きつけている。

ラストイネイルの後ろにも緑のザム。 正面の菜月の物ではない指揮官用ザムの後ろにも二機の緑ザム。

「まず一つ聞く」

その女の声には甘さはなかった。 絶対の勝利を前に一切の油断はない。

「貴様達は敵か、味方か」

「今は医者にいる方の味方さ」

赤矢の声に敗北感はない。あるのは、ただの意志。妹を助けようとする意志のみだ。

「はっ」

女が笑った。ザムが膝立ちになり、ハッチが開いていく。

「それはいい。我々、ヒューマンは戦う術に関してはいまいちだが、医術に関しては大陸一だ」

砂時計のような肉感のある身体はきつちりと仕立てられた男物であるう服、豊かな金の髪はまるで獅子の鬣。深窓の令女でも通りそうなほどに白く整った顔は強い意志に満たされ、近くににいる者に安らぎよりも緊張を与えるだろう。

深紅のマントを翻し、女は言った。

「歓迎しよう、異境の者よ。私は、アーデルハイト王国は貴様らを賓客として迎える事に決めた！」

スカイブルーの瞳は赤矢に興味に輝き、ペットでも見るような不愉快な視線。

このやろう、完全に俺を下に見やがって。赤矢の反骨精神はむくりと起き上がった。

しかし、背中に背負った重みは、反骨精神のままに動く事を赤矢に許さない。

それでもその反骨だけは視線に籠めた。

女の形のいい左の眉が持ち上がった。

「ああ、世話になってやる」

「はっ、礼の一つを言ってくれても構わんよ」

その上目線が気に食わない。相手も自分に頭を下げない赤矢が気に食わない。一目見た時から、お互いに相手が気に食わない。しかし、お互いに場をぶち壊すような言葉を吐いてしまえば、それは敗北だ。相手を屈伏させる事に失敗し未来永劫、相手の下に立ち続ける事になる。

赤矢と女は状況を忘れて睨み合った。

「なあ、お前」「おい、貴様」

不味い事になっている、と思いながら、赤矢も女も引くに引けない。

さながら闘牛と闘牛が角を突き合わせているかのように、力を抜いた瞬間に相手に突き殺されてしまうだろう。

「ありがとうございます！」

しかし、睨み合う二人を止めたのは菜月だった。

「きーちゃんは私の大切な友達で、赤矢の大切な妹なんです」

後半の言葉は赤矢に向けて言ったのだろう。きいろを忘れて遊んでいた赤矢に、目を覚ませと言っている。

「きーちゃんを助けてください！」

それは純粹な願いだった。面子も打算もなく、ただ助けを求める声。

「だから、お願いしまあいたー!？」

「ごちん、と派手に何かをぶつけた音。ああ、コクピットの中なのを忘れて、思いつきり頭を下げてぶつけたのか、あのバカ……と赤矢は一瞬にして事態を把握。

「俺からも頼む。妹を助けてくれ」

赤矢は深々と、背中のきいろに負担がかからないように頭を下げた。

面子やプライドより、きいろが大事なのは最初からわかっている。それなら頭の一つや二つ下げるべきだったのだ。

「ああ、私、アーデルハイト王国第三王女トゥルーデ・アーデルハイトの名に賭けて、貴様らの大事な者の治療に全力を尽くすと約束しよう」

二人の間の言葉から毒気が抜けていた。

「バカも役に立つもんだなあ……」

「まったく、世の中はわからんものだ」

「いたたたた……」

何故か操縦桿を握っているらしく、自分の頭ではなくザムの頭を抑えている菜月を見て、二人は笑った。

ここは異世界。 多分、異世界。(前書き)

繋ぎにも程がある回。

ここは異世界。 多分、異世界。

団地があった。

「えー……」

集合住宅である。 何棟も並んでいる。

四階建てで普通に日本にもありそうな団地が

菜月はザムから降り、馬車に乗せられたきいろに付き添っていた。

菜月が自分の指揮官用ザムを預けた兵士は、鉄の鎧兜を装備し、

明らかに中世ヨーロッパ的な感じを菜月に与えていた。

なのに団地。

「ねえ、赤矢！」

借りた通信機に菜月は叫んだ。

「……いや、巨大ロボットとかあれば、クレーン車とか重機いらねえしさ……作れなくはないんだろ？ ……なんで俺がフォローしなきゃならないんだ」

まだ二人とも決定的な一言は言っていない。 ここはどこだ、という一言は何かを終わらせてしまう。 そう思ってこそだった。

しかし、

「だからってさあ……団地はないと思うんだ」

どういう世界観なんだろう、と菜月は思った。

道もアスファルトで舗装され、思ったより馬車は揺れない。 遠

くに見える青々とした田んぼが見える。

髪の色こそ黒だけではなく、赤や金、青や緑すら混じっているが、それ以外は日本の田園風景と大差がない。

「“こういう時”のお約束だと、凄い城壁がどーん！ でっかいお城がばーん！だと思っの」

「……だから俺に言うな」

田園風景と立ち並ぶ団地の中を巨大ロボットに囲まれながら、馬車に揺られる。こうして考えると意味がわからない。

「客人達よ、驚いてくれたか？」

「違う意味でならな」

「はっはっは、それはよかった！」

通信に割り込んできたトゥルーデは機嫌が良さそうに笑った。

「で、そろそろ貴様らに説明をしておこうと思う」

ついに来た、と菜月は思った。菜月が馬車に揺られている間、ずっとトゥルーデはどこかに通信していたらしく、赤矢と菜月は妙な緊張感の中に捨て置かれていたが、そこに自分から踏み込む勇氣は菜月には無かった。

「ああ、覚悟は出来ているさ。すぱっとやってくれ」

こういう時の赤矢の思い切りは羨ましくすら思える。菜月には

絶対に出来ない事だ。

今も菜月の心臓はどきどきと嫌な高鳴りをし、変な汗が流れてくる。うっすらわかつている事ではあるが、改めて人に言われるのは怖い。

「ああ、貴様らから見れば、ここは異世界だ」

「わかつてはいたが……それをマジで言われると、頭の中身がハッピ―な奴にしか思えねえな」

「ちょっと、赤矢！？ 何言ってるの！ 相手は王女様だよ。よくわかんないけど多分、偉いんだよ！ どうなのかな、偉いの？」

「俺が一番、偉いな」

「ははは、抜かせ。貴様が私の上に立てるはずがあるまい」

「あ？ 生まれた立場だけで俺を下に置けるとでも思ってるのか？ そいつはおめでたい脳みそされてますな」

「貴様こそ生まれ持った、その野良犬のように見窄らしい品性で私の上に立とうとでも？ 哀れ過ぎて笑いすら起きんな」

「おやおや、お偉いお姫様は言う事が違いますな。ワタクシのようなチンピラ風情にマジギレですか？」

「まさか。貴様こそキレてるのではないか？ 顔真っ赤にして、器の小さな男だな」

先にキレた方が負け。 そんなチキンレースが、二人の間で始ま

った。

しかし、赤矢に付き合つて、よく巻き込まれる菜月からすれば、日常茶飯事である。自分が矢面に立たされなければそれでいい。そんな悟りを開いていた。

「きーちゃん、私一人じゃツツコミが間に合わないよ」

眠っているきいろの髪が、目にかかっていたのを払う。

数時間経つて、日が沈みかけてはいるが未だにきいろは目を覚まさない。

しかし、治療してくれた兵士の話によれば、頭蓋骨に罫が入っているような事もなく、ただの裂傷。一応、痛み止めの薬で眠らせているらしい。

「お前のようなツツコミがいるか」

「貴様のようなツツコミがいるか」

「私の真似するしか能がないのか、てめえは」

「猿は猿真似が上手いらしいな」

結局の所、似た者同士なんだろう、と菜月は結論を出した。面倒になった菜月は馬車の幌から顔を出した。あ、あのぶたさん可愛い！などと思いながら、スルーする事にした。

周りにいるトゥルーデの部下達は、口を挟んでいいのかどうかおろおろするだけだ。

「抜けよ、クソ姫様よ」

「いいだろう、騎士としての力を見せてやる」

「あ！」

菜月の視界に団地と田んぼ以外が映った。

「お城だ！ ファンタジーっばい！」

城壁はないが、菜月のイメージしていたような城が、団地の影から姿を現した。

「でも、団地より小さい！」

団地の三分の二ほどの大きさで、ちんまりとした印象を菜月は受けた。

「うっ……仕方ないではないか。敵が巨人族ティターンでは城での防戦にあまり意味はないのだ」

「つまり、いざって時は団地を壁にして戦うってか？」

「そうだ、あの城はあくまで王の住居としての象徴だ」

団地群を抜けると、ザムが五機は横並びになれそうなくらいに大きな道が広がっていた。アスファルトで舗装され、その横には洋風の豪邸が居並んでいる。

「お姫様よ、俺達の前に異世界から来た人間はどのくらいいる？」

「五十年前から数えれば、千人は超えるな」

「だからか、このちぐはぐな感じは」

豪邸の前には鎧兜を着て、槍を持った衛兵の姿が見える。そのくせ道はアスファルトで舗装され、所々にマンホールの蓋。下水道が作られているのだらうと赤矢は考えた。

「そうだ。貴様達のように何らかの機体を持った異世界の人間達の英知で、アーデルハイト王国は発展してきた」

「その割には決定的に足りないもんがあるな」

「ほっ」

さつきまで一瞬触発の空気だった赤矢とトゥルーデだが、すでにトゥルーデの言葉に険はなく、面白がるような色があった。

菜月はあちこち見回すのに忙しいのか、話に混ざらうという気配すらない。

「巨大ロボットに団地やら下水道はあるくせに、電気がないってのはどういう事だ」

道の横には街灯が立ち並んでいるが、ツナギを着た人間が長い鉄の棒で、街灯に一本一本、火を灯している光景があちこちにある。

電灯とは違う柔らかな光が、薄暗くなり始めた辺りを照らす。

ラストイネイルから見える範囲に、煌々と灯る電気の光は見えない。見えない。

「下水道や団地を作れる知識があるだけの人間が、電気関係に一切手を出さないなんてあり得ねえ。今まで一人二人しか来てないな

ら電気関係の知識を持っていなかったかもしれないが、それだけの人数が来ていて誰一人、電気関係の知識を持っていない事があるのか？」

「ふむ、確かに我が国は法からインフラ整備まで異世界人の影響を多大に受けている。だというのに、電気がないのは単純な話だ」

「そうか……つまり」

「ああ、この世界に電気という物は存在していないらしい」

異世界。その言葉通り、まさに異なる世界だった。まず物理法則からして違う。

「じゃあ、そのザムやらラスティネイルはどうやって動いてるんだ？」

「エーテルだ」

「……いきなりファンタジーな単語だな」

「私に詳しい事は聞くなよ？ あとは人型と戦車と通信機でなければ、エーテルが働かない事しか知らん」

「戦車だけ？ 砲を外してたりしたら駄目なのか？」

「ああ。何故だかは聞くなよ、私は知らないからな」

「けっ、戦争狂いの物知らずめ」

「その通り、私はアーデルハイトの戦姫だからな。技術的な事は部下に聞けばいい。私に出来るのは戦いだけだ」

挑発を妙に誇らしげな態度で受け取られてしまい、赤矢は面白くなくて黙った。

「それにしても……」

「ん？」

「いや、なんでもねえよ」

赤矢の中に沢山の疑問が膨れ上がっていく。

しかし、その疑問はどうやら後回しにするしかなさそうだった。

ザムすら軽々と入れる城門が重々しく開いていく。

槍や剣を持った完全武装の兵士が、あちらこちらに見える。

「貴様らには王に謁見してもらおう。無礼のないようにな」

「俺は黙ってる。菜月が話す。これでいこう」

赤矢はさも名案を思い付いたかのように、

「うむ」

トゥルーデはさも名案を聞かされたかのように頷いた。

「えー！？」

菜月は叫んだ。

そついで事になった。

こいつはバカか、大物か

ラストイネイルの中にいるというのは、想像以上に守られていると感じていたらしい。赤矢はそう思った。

ラストイネイルに乗っていた時は、何の意味があるのかと思っていた衛兵に威圧感を感じる。剥き出しの槍の穂先が、今にも襲いかかってきそうで落ち着かない。それが数え切れないほど両脇に並んでいれば、恐怖すら感じるほどだ。

獣油で燃える松明があちこちにあるが、それでも電球の光には程遠く、城の中は現代人の目には薄暗く感じる。

そして豪華な調度、真つ赤な絨毯は恐らく慣れていない人間を脅えさせるための物だろうと、赤矢は心の底から信じた。

「ふおー……テンション上がるね、赤矢。ファンタジーって感じだよね！」

「……俺はお前がすげえ大物じゃないかと思う時がある」

「でしょ？」

鼻息を荒く、あれが凄いこれが凄いと指を指す菜月から距離を置きたくなるが、放置したら壺の一つでも割りそうで目が離せない。

そうなれば一体、どんな事になるというのか。

「ぶっ」

と、左から思わずといった笑い声が聞こえてきた。フルプレート
の鎧は誰が笑ったかわからない。しかし、笑うという事は、中身
は人間なのだ。

相手が人なら自分が勝つ。いつものように何の根拠もない自信を再確認した赤矢は、表面上はいつものようにふてぶてしい態度で、中身は何一つ見逃さないために集中をし始めた。

トウルデーはどこかに行った。彼女は個人としては悪い人間ではないだろう。気に食わない所もあるが、真つ直ぐぶつかつてくる態度は悪くはない。

だが、私人としてのトウルデーは信用出来ても、公人としてのトウルデーは信用出来ない。なにせまだ何の情報もない。

「アーデルハイト王国国王、ジョン二世陛下ご出座！」

その言葉と共に入ってきたのは、老人だった。氣力を失い、どこか枯れたような印象を、赤矢は受けた。

「なお異世界からの客人である彼らに、当世界での礼儀作法への言及は一切、認めぬ」

王の横に立つ壮年の男の声には張りがあった。見苦しいほどに瘦せこけ、眉間には深々と皺が寄っている。彼が笑顔を浮かべている所を想像するのは、なかなか難しい、そんな気難しい顔をしている。

「まあ楽にせよ、と言った所で難しかろうが力を抜いて欲しい」

五十歩ほど離れた正面にある玉座に座った王は言った。その声に温かみはあるが、離れているため聞こえにくい。

「はい、わかりました！」

手を上げて答える菜月に、赤矢は頭痛を覚える。絶対、終わっ

たらひつぱたいてやる、と思った。

ほっほっほ、と鼻のように国王が笑ってくれたからいいが、横に立つ男の眉間の皺が更に深くなる。

「王様、王様」

「なんだね、異世界のお嬢さん」

「むっ、私は異世界のお嬢さんなんて名前じゃありません。私は青野 菜月でこっちのバカっぱいのが斎藤赤矢です」

このやろっ、と思ったが、国王の横に立つ男が、凄い顔でこちらを見ていた。よほど国王を大切にしているのか、下手な事をすれば周りの衛兵をけしかける気満々にしか見えない。

「それはレディに済まない事をしたね。 菜月……いい名前じゃないか」

「えへへ、ありがとうございます。 お父さんとお母さんが菜の花畑で、月を見ながら告白したから菜月って名前になったんです」

男の視線と赤矢の視線がぶつかり合った。 ぶつかり合ったというのは正確ではない。

申し訳ないと言いついようがない赤矢は、視線をすぐに逸らした。

「ほう、それはロマンチックだねえ。 君達もそういう関係なのかい？」

「あはははは、やだなあ王様は。 私と赤矢はただの幼なじみです」
「よう」

「ほっほっほ、余が十年若ければ立候補していたんだがねえ」

「王様はまだまだ魅力的ですよ。お髭がキュート！」

あつはつは、ほっほっほと笑う二人に、赤矢は冷や汗をかき続けている。男からの視線は少しの間は菜月に行っていたが、すぐにまったく気付かない菜月から赤矢へと戻ってきていた。

「……な、なあ、菜月」

「ん、どうしたの？」

「きいろが心配だし、そろそろお暇しようぜ」

「むっ」

「どうかしたのかね？」

「実は……」

と、国王に言葉を返そうとした赤矢に菜月が割り込んだ。

「王様、お願いがあるんです！」

「む？ どうしたんだね、菜月」

いいから、こいつを黙らせる。

いや、俺のせいじゃないって。

赤矢と男は目と目で会話をしていた。

何故、こんな気苦労をせ

にやならんのだ……と赤矢は嘆く。

「お友達が怪我をしちゃって……助けてください、王様！」

「ほっほっほ、それくらい任せておきたまえ。　ディートハルト」

「はっ」

国王の横に控えていた男、ディートハルトの完璧な一礼。　棒でも入っているのではないかと思うほど、ぴしっと伸びた背筋。

「菜月の友人に典医を差し向けよ」

「お言葉ですが、かの者の怪我は浅く命に別状はないと。　それに典医を王族以外に差し向けるのは、大貴族ですら滅多にない名誉で」

「ディートハルト、余は命を下した」

「はっ」

つらつらと何事かを言おうとしたディートハルトを遮り、命を下した国王は確かに威があった。　枯れた老人ではなく、力のある王の姿だと赤矢は感じた。

「これで一安心ぞ、菜月」

「ありがとう、王様！」

まあ一瞬で孫にでれでれする老人になってしまったが。　受けた命を実行するため、ディートハルトが退出すると邪魔者は

消えた。

それからしばらく後、菜月と手を繋いだ国王と、オマケの赤矢とがっしやがっしや音を立てながら歩く衛兵達を引き連れての、お城探検ツアーが始まったのだった。

戻ってきたディートハルトに、赤矢は殺意すら感じられるような瞳で睨まれた。

「あほか！」

「くつくつく……それはご苦労だったな。宰相殿は実力と忠誠心は人一倍だが、器の小ささも人一倍なのだ」

すでに日はとうの昔に暮れ、城の中は暗い。赤矢と菜月は与えられた一室でトゥルーデを迎えていた。テーブルに肘を突きながら紅茶を飲む姿は、王女らしい品など欠片も感じられなかった。

「王様、いい人だねえ」

「父上があんなにも誰かを気にしているのは久しぶりだ。よければまた相手をして欲しい」

「うん、もちろんだよ」

「俺はごめんだね、生きた心地がしねえ」

「安心しろ、お前の話は一言も出なかった」

「そいつは結構。こっちに来てから、初めて聞きたいいい知らせだ」

ぐいっと煽るように紅茶を飲み干せば、確かに美味しい。コーヒ
ー派の赤矢ではあるが、この豊かな香りの前では紅茶党に鞍替えす
るのも悪くはない。そう思うほどだった。
部屋も広々とし、与えられる物は最高級品。悪い扱いにはなり
そうにない。

「まあ色々と心配していたが、考え過ぎだったようだな」

「なんだ、もう行くのか？」

紅茶を一杯飲むだけでトゥルーデは腰を上げた。

「ああ、実はまだ仕事の途中だな。それとも何か？ 私ともっと
長い時間を共にしたかったのか？」

からかうように微笑むトゥルーデに、赤矢は真剣な顔で言った。

「ああ」

「っな！ き、貴様、出会ったばかりだというのに、何とふしだら
な！？」

「うるせえバカ。お前、色々と説明するって言いながら、何も説
明してねえだろ」

「はっはっはっは」

笑って誤魔化したトゥルーデは肩を竦めながら言った。

「改めて貴様達を歓迎するよ。異世界人でなくとも、ここ最近塞ぎ込んでいた父上をあんなに楽しませてくれて、私と正面から話せる貴様達は、私にとってきつと得難い存在なのだと思う」

嬉しげに、実は自分達と同年くらいじゃないか？と赤矢が思うほどに幼い笑顔をトゥルーデは浮かべていた。

「詳しい話は明日、貴様達の妹がいる場でしょう。今日はゆっくり休むといい」

「あ、ああ」

「おやすみー。お仕事頑張ってね」

次の日、赤矢と菜月に伝えられたのは、アーデルハイト王国国王
ジョン二世の崩御の知らせだった。

メイドさんって凄い！

ベッドは違和感があった。布団派の菜月は寝ている間に転げ落ちてしまいそうだと不安だったが、それは杞憂に終わったらしい。

同室にされた赤矢がいびきをかきながら寝ている。半分、ベッドから落っこちそうになっているのを、ちゃぶ台返しするような勢いで無理矢理、戻した。

一人だったら、不安で泣いていたかもしれない。それを考えれば、ぐーすかと寝ているこの間抜け面に感謝していいのかも、と考へはした。

しかし案外、神経の細い所がある赤矢は、きっと自分がいて感謝しているはず。つまり、ファイファイファイであり、感謝する必要はないだろう。むしろ、ずれたかけ布団を直してやった事で、菜月の勝ちだ。

多分、誰も知らない異世界に来てしまった人のためにある部屋なのだろう。ベッドが一つ空いている。

恐らく今日にはきいろと再会出来るはずだ。

寝室から出るとリビングにテーブルを囲むようにソファが向かい合わせに二脚ある。リビングと言うのかはわからないが、いくつか部屋がある空間を一部屋と呼ぶ習慣は菜月にはない。トイレが妙に広々としていて落ち着かない。

両開きで、大きなガラスがはめ込まれた扉を開いて、テラスに出た。冷たい空気が心地よかった。

朝日は異世界でも変わらずに綺麗だった。変わらな過ぎて、朝日だけ見れば元の世界かと勘違いしてしまうほどだ。

しかし、街を見下ろせば妙な景色が広がっている。城の近くであればあるほど豪華な建物。赤矢の言う話では多分、貴族の家らしい。一つ一つの家に個性があり、それを眺めているだけでも面

白い。

でも、さすがに屋根から壁から柵まで金色の屋敷はどうかと菜月は思った。城のすぐそばで無駄にキラキラされていて、目に痛い。見つめていると、頭がおかしくなりそうな屋敷から目を逸らし、視界を遠くに移す。

城から見ると団地の群れは、まるで城壁だった。昨日、赤矢とトウルデーが話していたのは、こういう事だったのかと納得。いざという時は、団地の後ろに隠れながら戦うのだろう。

ゲーマーとしての性で、あの団地を生かしての戦い方をシミュレートする。壁に隠れながら、射撃をするだけで勝率はぐっと上がる。隠れる場所がない機体と、壁に隠れながら戦える機体のどちらが有利かなど考えるまでもない。

もし、逆に攻め手なら壁ごとぶち抜けるシルバー号の手法が有効だろう。

「……ああ、駄目だ」

視力三・〇の菜月の目が人の姿を捉えた。団地のベランダで洗濯物を干す主婦。青い髪は異世界に来た証拠なのだろう。しかし、そこに住む人間は、何一つ変わっていない。

「駄目だねー、ゲーマーってやつは」

壁としてだけ見るのは無理だ。もう人が住んでいるのを見てしまった。

赤矢は何も言わないが、どこか様子が大人しい。異世界に来たせいなのか、それともまた別の理由なのか。どこか妙な空気を漂わせていた。

菜月が赤矢を気にするように、あの団地に住む誰かは、違う誰かを気にしているのだろう。

菜月は踵を返して、室内に戻った。

「おはようございます」

「ひい!？」

室内にはいつの間にかエプロンドレスの女性の姿、所謂メイドがいた。人がいるとは思わなかった菜月は、本気で口から心臓が出るかと思うほどに驚いた。

紺と城のエプロンドレスのスカートは足首まで隠すほど。シヨートボブの原色の赤髪が印象的だ。目鼻立ちは特色がなく、逆にそれが不自然な気がした。

「青野 菜月様ですね」

「は、はい……」

「こちらを斉藤赤矢様にお渡しください」

メイドが取り出したのは一通の封書だった。差出人は書かれていない。受け取って裏面を確認したが、それは変わらない。

「あの、誰から？」

「申し訳ありませんが、お答え出来ません」

「はあ……」

メイドの爬虫類じみた冷たい空気が、菜月の接し方を迷わせる。

「それではあちらをご覧ください」

メイドが右手を上げた。そちらの方に視線をやれば、

「すごっ!？」

大きめなテーブル一杯に並べられた朝食の数々。まだ湯気が立ち、出来立てほやほやだ。

「それでは失礼いたします」

その声に菜月が視線を戻すと誰もいない。部屋中を見回そうとしない。

「メイドさんって凄い……」

と、菜月は思った。

「メイドさんって消えるんだね」

「何の話だ」

叩き起こされた赤矢は、菜月と共に朝食を取っていた。右手にはフォーク、左手には菜月が預かった手紙を持っている。

行儀がよくないのはわかっているが、名前も出さずに手紙を渡してくるといのは何か事情があるのだろう。早めに読まなければいけない。そして赤矢は腹が減っている。この二つを同時にこなすには、これしかない。

きいろがいたら怒られるんだろうな、と思いながら、ここにいない妹への理論武装という名の言い訳を作った。

「その手紙は何が書いてあるの？」

「んー……ちよつと待て」

片手で器用に封書を破ると、中の文面に目を通して行く。

『私だ』

いきなり飛ばしてきやがるな、あの姫様と思いながら、赤矢は続きを読む。

『昨夜、父上が亡くなった。原因は心臓麻痺。しかし、私でも父上のご遺体に会えない』

きな臭い事になっている。和やかな朝の食卓に、どろりとした空気が降りてきた気がした。

『恐らく異世界人の貴様らは必ず巻き込まれる事になる。その前にこの国を出ろ。私は貴様らに構っている暇はなくなった』

赤矢は無心で箸で摘んだソーセージにかぶりついた。ハーブで肉の臭みが消えているくせに、ピリツと効いたスパイスがうまい。異世界に来たというのに、箸で飯を食っているというのは何なのだろうか。

『貴様らが帰る方法はある。詳しくは誰かに聞け。私はよく知らん』

何の役に立たない。知識関連でトゥルーデに頼るのはやめようと心から思った。

『ただし、出て行くにしても異世界人証明書を手に入れるべきだ。これがあれば宿や食事に困る事は滅多になくなる。貴様のような貧乏臭い人間には泣いて喜ぶ代物だろう』

「なあ、菜月。ちょいとお前、あの姫さん殴ってきてくれよ」

「私、ご飯食べるのに忙しいから」

視線を菜月に移せば、三杯目のご飯をしゃもじでよそう所だった。バターのいい香りがするスクランブルエッグを口に運ぶと、女とは思えない勢いでご飯をかき込んでいく。

あれだけ食えば、そりゃ乳もでかくなるわな……と再確認した。

『申請は王がいないから宰相に頼め。器は小さいが理非はわきまえた御仁だ。以上』

「宰相ってあのおっさんか……」

宰相ディートハルト。散々、赤矢を睨んで来た男。最初に菜

月という負い目があったせいで、妙な苦手意識が出来てしまっていた。

俺が悪いわけじゃねえんだけど、と思っても何となくしんどい。

「ん、お手紙なんだったの？」

「……あー、国王が亡くなったんだと」

菜月の変化は劇的だった。

「行くよ！」

「どこにだ」

「王様と昨日、友達になったの。王様の顔を見に行く」

社会的地位などまったく気にせず、お菓子をくれそうな相手に全力で懐く菜月は、年寄りに非常に可愛がられる。

いつも可愛がられていたどこぞの社長が亡くなった時は、いきなり葬式に乗り込んだせいで隠し子か何かだと思われて大騒動を巻き起こした。

「駄目だ」

「どうしてさ!?!」

「絶対に駄目だ。きいろを連れて、なるべく早くこの国から出ていく」

「……赤矢」

目に涙を浮かべる菜月に内心ではたじろいだ赤矢だったが、今回は何があっても譲れない。

隠し子と思われる程度ならいい。

しかし、王を暗殺するような相手が、関わってこようとするとする菜月を見逃してくれるだろうか。赤矢はそんなリスクばかり大きく、リターンの無い話に賭ける気にはならない。

「今回だけは諦める。……頼む、菜月」

菜月ときいろを絶対に無事に元の世界に帰す。今の赤矢はそれ以外を考える気はなかった。

「うー！ うー……！ うー……」

「菜月」

「わかったよ！ 赤矢がそこまで言うなら、何かあるんでしょ！？ ……我慢する」

目に涙を浮かべて、菜月は小さく何かを呟く。赤矢はその言葉を聞いたが、何も聞こえなかった。聞く権利はないと思った。

「悪いな」

「悪い事してないのに謝らないでよ。私達の事、考えて言ったんでしょ？ それより」

扉を叩くノックの音が二人の耳に届いた。

「失礼します。 宰相閣下がお二人をお呼びです」

「ああ、わかった。 少し待ってくれ。 ……説明する暇はない」

後半を小さな声で菜月に囁くと、赤矢は立ち上がった。

「交渉は苦手なんだよなあ……」

ぼやく赤矢に菜月は自信満々に言った。

「それなら私に」

「任せない。 どこからその自信が湧いてくるんだ、バカ」

沈むとわかつている泥船に乗る趣味は赤矢にはない。

他人を乗せたまま、下手を打てば沈みかねない状況は背筋が凍り付きそうになる。

それでも赤矢はやると決めた。

愛じゃ異世界を救えねえんだよ、夏。

美男美女と呼ぶに相応しいカップルを決める機会があるとすれば、この二人以上はそう簡単にいないだろう。菜月は嫉妬も僻みもなく、素直に思った。

神様がカップルという題材で丁寧に作り上げた一組の男女と言われても違和感がない。

その空気は陽の陽で、明るさに満ちて溢れている。なのに菜月は何故か言葉を発する気が起きない。

「あなた方が異世界から来た方々なのですな」

衛兵の列を抜け、正面の玉座に座るのは昨日、菜月と友達になった王様ではない。

美しいドレス、美しい宝石の数々。しかし、その微笑みはそんな飾りとまったく釣り合っていない。人々が千金を出して求めるのは彼女の微笑みだろう。装飾品が彼女に完全に負けていた。

「わたくし、トゥルーデの姉の第一王女リーゼリアです」

「ハニー、それは違うだろ？ 君は今日から王だ。アーデルハイト国、国王リーゼリアと名乗るべきだよ」

リーゼリアの横に立つ男も、また美しかった。言葉にいちいちオーバーアクションが付くが、それがまた絵になる美男子。

「あら、嫌ですわ。わたくしったら、うっかりしてしまいました。許してくださいね、異世界のお友達のお二人」

「いえ」

赤矢の言葉は短い。菜月を守るように一歩、前に出ている赤矢の背中には力がある。それがいい物なのか、それとも力みなのか、菜月にはまだ判断が付かなかった。

「おっと、僕も名乗らせてくれたまえよ、異世界の友人達！僕は今日から宰相を勤めさせてもらうアスラーダだ。よろしく頼むよ」

「斎藤赤矢です」

「あらあら、緊張していますの？ うふふ、可愛らしいですわね」

「心配する事はない。僕達はすでに友人さ。何かあるなら言うてみてくれたまえ」

「あの、妹に会いたいんですが」

くすくすとリーゼリアは笑った。品よく、童女のような笑いだった。

「それは駄目ですわ」

言葉に何一つ悪意を感じない。

「あの子が気に入りましたの。わたくし、大事な物は箱に閉まらせて隠してしまいたい質ですから、兄の貴方でも会わせてあげられませんわ」

それだけに一瞬、彼女が何を言っているか菜月には理解出来なかった。

「は？」

それは赤矢も同じだったらしい。思わずと言った感じで、呆けた声を上げた。

だが、その声はレーザーに届かなかったのか、彼女は平然と話を続けていく。

「あの子すごく可愛らしいですね。お兄さんとして鼻が高いのはなくて？」

「昨日から僕のハニーは君の妹に夢中でね。つつい嫉妬してしまいそうになるほどだよ」

「あら、私の心は貴方の物だと信じてくださいますか？」

「まさか！ 君の愛を信じないはずがないだろう！ 君の愛が失われたと考えるより、この地面が存在しないと信じる方が容易いよ」

無邪気に笑い合い自分達の世界に入る二人に、菜月は絶望感すら覚える。言葉が通じているはずなのに、どうしようもない断絶がある。

「赤矢、抑えて」

無言で拳を握り締める赤矢に、菜月は声をかけた。どんな表情をしているのかはわからないが、ここで赤矢が殴りかかったりしてしまえば、それだけで全てが終わる。

そんな菜月の心配をよそに赤矢は、いつそ朗らかと言っているほどの声をあげた。

「いやあ、うちの愚妹をそんなに気にいっていただけなんって、光栄な話ですな、あっはっはっはっは！」

あ、赤矢が壊れた……！。菜月は思った。

「アーデルハイトの美姫と名高いリーゼリア様に気にいっていただけるなど、我が妹ながら何と幸運な事でしょうか！ いやはや、まったくこれで今世だけではなく、来世にいたるまでの幸福は約束されたようなものでしょう！」

「あの子にクッキーをあげましたら、まるでリスみたいに食べますのよ。あの小さいお口で食べている姿は、とても愛らしいですわ」

「そうですね、そうですね。あの子はまさに私の宝です。昔は……おっと、これを人前で言うわけには」

なんだ、この茶番と思ったが口は挟めなかった。赤矢の肩はぶるぶると震え、力が籠もっている。わざとらしい赤矢の演技にリーゼリアはまんまと引っかかった。

「なんですの。　　言ってみてくださらない？」

「いえ……こんな事を人前で言うわけには」

「あの子はわたくしの物です。　　わたくしは知る義務があります」

リーゼリアのすらっとした眉がつり上がるが怒りというより、まるで子供のわがままにしか見えない。　　しかし、それでもなお彼女は綺麗だった。

もし写真の向こうで彼女を見れば、菜月も懂れずにはいられなかっただろう。

しかし、どこまでも自分本位、一言で言えば子供の彼女に尊敬の気持ちは起きそうになかった。

「……姫様のお言葉に逆らうつもりはありません。　　しかし、人前で妹の秘密を明かすわけには……」

「どこに人がいますの！　　ここにはわたくし達しかおりませんわ！」

その言葉はきつと彼女の中では真実なのだろう。　　わがまま放題に育てられた子供の目に、衛兵の姿は映っていない。　　衛兵はあくまでも衛兵。　　リーゼリアの中では人ではない。

一矢乱れずに揃っていた衛兵の穂先が、少しだけ動いた。

もし、この中の一人が兜を脱ぎ捨てれば、リーゼリアは目を丸くして驚くかもしれない。

きつとリーゼリアの中では、切り身の魚が海に泳いでいるのだろ
う。

「わかりました。 なら」

と、赤矢はきいろの失敗談を面白おかしく語ってみせた。 犬に追
われたきいろを語る所など、四つん這いになりながら、滑稽に転げ
まわった。

最後には腹を抱えて笑う夫婦に、菜月は心の中で手を合わせた。

話の途中で背中に回した手。

この世で三人しか知らないハンドサインで、赤矢は菜月に語りか
けてくる。

『今は耐える。 あとで潰す』

そして、リーゼリアとアスラーダに気にいられた赤矢は、宮廷道
化師として取り立てられる事になった。

皆、自分の好きにしか動かない(前書き)

もうランキング狙いとかより、好きに書くしか出来ないと悟りました。

皆、自分の好きにしか動かない

どうすればいいだろう。 きいろはずっと考えていた。

静かにほろほろと涙を流すリーゼリアは、女の身であるきいろにしても背筋が凍るような想いを抱かせる。美しく可憐な彼女の涙は、百万の真珠よりも輝きながら、心を殺す毒にもなりかねない。彼女を慰め涙を止めて差し上げなければならぬと、心の底から思わされてしまう。

しかし、

「駄目です」

きいろはリーゼリアを否定した。彼女の心が求める所を知らないから、一言で切って捨てたのだ。

そんなきいろのあまりの言葉に、リーゼリアの背後に控えるメイド達が目を剥き、やがて恐ろしい狂相を浮かべた。メイド達の忠誠は信仰の域まで達している。

「し、しかしだね、きいろ。 ハニーがこんなにも泣いているのだ！ 許してやってはくれないだろうか」

リーゼリアの横に座るアスラーダが慌てて取りなす。額に冷や汗を浮かべながら慌てる彼を見て、きいろは残念な美形だな、という所まで評価を下げた。

「駄目です」

アスラーダが聞き違いをする余地がないくらいの否定。

「きいろ……」

哀れを催すリーゼリアの懇願。

「駄目です」

そんな物に構ってはいられない。 きいろには信念がある。

「ピーマンを残さずに食べなさい」

豪華な食卓の上に、いつそ質素と言っても過言ではないほどの皿の数。 その日暮らしの平民から見れば贅沢極まりないだろうが、王と宰相の食卓だとは信じられないほどの侘びしさだ。

しかし、その皿の上は綺麗に食べ尽くされ、今なお残っているのはリーゼリアの前にある皿のピーマンのみ。

戦闘で気を失った後、きいろが目覚めたのはリーゼリアの寝室。

きいろの何が気にいったのか、リーゼリアはどこに行くにもきいろを連れまわした。

王様と食事を共にするのは名誉な事なのだろうか、と不敬な事を考えながらも、きいろはそれに着いていった。

「ご飯を残すのはいけません」

大量の豪華な食事に、ほとんど手をつけない二人にきいろはキレてしまったのだった。

祖父と祖母が百姓を営んでいる斎藤家では、ご飯一粒残す事すら許される事ではない。 世の中の百姓がどれだけの苦勞をしているのか、リーゼリアの胸倉を掴んで説教したのは、さすがにやり過ぎたと反省はしている。 謝らないが。

それから自分達が食べられる範囲だけを作らせる事にしたのだっ

た。

「で、でもお……」

「リーゼリア」

にっこりときいろは微笑んだ。その事に何か期待したのか、リーゼリアの泣き顔が少しだけ緩んだ。許しがあるはずはないのに。

「食べなさい」

「うづ……いじわる。きいろのいじわる……」

「リーゼリア」

「わ、わかりました。そんな怖い声出さなくてもいいじゃないですの……」

めそめそしながら、リーゼリアはピーマンを口に運んだ。頬袋に餌を貯めるリスのようになったリーゼリアの顎は動かない。

「噛みなさい」

観念したのか、ゆっくりとリーゼリアはピーマンを噛み始めた。アスラーダやメイド達は拳を握り締め、心配の眼差しで見つめている。

大の大人が何やってるんだ、と思うがわざわざ口には出さなかった。

「にがい……」

「ゆっくり噛んでいけば甘く感じるようになりますよ」

子供を接するように焦らず、自分のペースでやらせる。それが一番だと、きいるはこの二日の付き合いでリーゼリアから学んだ。文字通り苦虫を噛んだような顔をするリーゼリアの表情が、徐々に驚きへと変わって行く。

「……美味しい」

「……ハニー？」

「美味しいですわ！」

「それは本当かい！？ 凄じやないか、きいる！ ハニーにピーマンを食べさせるだなんて！ そうだ、今日という日を記念してきいる記念日を制定しよう！」

「まあそれはいい考えですわ！」

「ひっぱたきますよ、そんな事したら」

善良なのだろう、ときいろは思った。二人に悪気は一切無い。しかし、この二人が王様と宰相というのは、下にいる人間からすれば悪夢以外の何物でもないだろう。

見た目だけは完璧な二人は、ただ微笑んでいれば全てが上手いく。彼らに嫌われたくないと思えば、嫌がるような事は言わない。だから、彼らは何も教えられず、善悪の判断がない。

もしも、「民衆が税金で困っているから、税金を無くしましょう！」と言った時、リーゼリアが「それは可哀想ですわね。そうし

ましよう」と言う可能性すらきいろは感じる。

個人の身で考えれば税金は悪だろう。しかし、集団としての国家の立場で考えれば絶対に必要な物だ。もし、町から町へ道を引きたいと思っても個人では出来ないだろうし、治安を守る警察に払う給料もなくなる。

ただの金持ち貴族なら何とでもなるだろうが、王と宰相がこれでは遠くない内に破綻が見えている。誰もがこの事に気付きながら、誰も言わない。

どうしてこの二人に権力を渡すような真似をしたのだろうと、心の底から先代の王の頭の中身をきいろは疑う。兄風に言うなら、頭に脳の代わりに梅干しか何かを詰めていたのだろう。

そして、何より不味いのは、

「そろそろ兄に会いたいのですが」

「そ、それは許しませんわ!」

おろおろしていたリーゼリアが、慌てて口を開いた。

「そつだよ。そんな事したらここを出て行くつもりだろう!」

アスラーダも続く。

どういうわけか、この美男美女で王と宰相という公私共に最高と言ってもいい二人は、きいろを手放そうとはしなかった。

しかし、兄が動かないはずがない。どういう手を使うつもりかは知らないが、兄が自分を放っておくはずがない。

どんな汚い手を使うかはわからないが、普通に政府転覆くらいは考えているだろう。

そうなった時、この二人が生き残れるのだろうか? そう考えてしまうのは、何だかんだと言いなから自分の中で情が湧いてきてい

るのだときいろは思った。

「出ていきませんか、しばらくは」

「きいろはずっとここにいたらいいですの!」

ピーマンを前にした時よりも、はらはらと涙を零しながら、それでもしっかりとした表情をするリーゼリアに、きいろは少したじろぐ。

「はあ……」

本気で押せば、きつと最後には折れてくれる気がする。リーゼリアもアスラーダも本質的にお人好しで善人だ。本当に相手が嫌がる事は出来ない、僅かな時間の中で思えた。

そう信じられる物を積みながらも、あと一歩踏み出す気が起きてこない。兄が動く前に何とかしないと、と考えながらきいろは深く溜め息を吐いた。

「困ったものです」

きいろの言葉にショックを受けた二人は、またおろおろとし始める。

また余計な物を背負おうとしている。そう思いながら、そこまで踏み込む事への迷いも得てしまっている。

ここが異世界だろうと、人が集まって出来た国なのだから元の世界と似たようなものだろう。このまま遠くに待つ明らかな破綻を待てば、この二人は処刑されるか、暗殺されるしかなくなる。今までに読んできた歴史の本などではそうだったし、そうなるのが自然でもある。

兄が手を出さずとも明らかに駄目になるのが目に見える。
そんな中、一介の女子中学生が踏み込んだ所でどうにかなるのか。
兄が動けば何か起きるといふ確信はあるにしても、自分自身に
それを何とか出来る力があるとは思えない。

「き、聞いてますの！？ お、王様の命令ですよ……！ わたく
しのそばにいてください……」

考えこんでいたら、無視されたと感じたり、ゼリアがまた泣いて
いた。正直、面倒くさいなと思いつつ、きいろは言った。
背後に控えるメイド達の殺気と嫉妬に満ちた視線を無視するの
も慣れてきた。

「仕方ありませんね、もう少しだけ付き合っただけです」

兄も勝手の違う異世界ではまだ動けないだろう。きいろはそう
判断した。

「やったね、ハニー！」

「今日はきいろ記念日にしましょうー！」

「だから、ひっぱたきますよ」

感情の籠もらないきいろの声に、再び脅える二人。

まあ何とかなるだろう、と案外、楽天家のきいろは考えたのだっ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8194y/>

バーサスゴッド・オフライン

2011年12月4日12時46分発行